神戸新聞NEXT

魚屋道に挑む（上）　江戸時代に鮮魚運んだ古道

大日霊女神社に立つ「魚屋道」の石碑の説明をする森下孝一さん（右）と尾坂吉三郎さん＝東灘区深江本町３

拡大

神戸新聞ＮＥＸＴ

拡大

コンクリートの舗装は終わり、砂利道へ。いざ峠越えスタート

拡大

森稲荷神社へと続く参道を示す「赤鳥居」＝東灘区森南町２

拡大

江戸時代、深江浜（神戸市東灘区）に水揚げされた鮮魚は六甲山越えの最短ルートで有馬温泉の湯治客のもとへ運ばれた。商人たちが利用したその道の名は「魚屋道」。現在も六甲山の登山ルートとして残る。道を守り、後世に伝える取り組みを続ける「魚屋道を歩こう会」のメンバーとともに、その道に挑んだ。（末吉佳希）

２月上旬の午前９時、阪神深江駅で案内役の森下孝一さん（７０）、尾坂吉三郎さん（６６）と落ち合う。阪神・淡路大震災後に同区の住民らが活動を始め、年に一度、歴史解説を交えた登山イベントも開いている。

「道のりは約１２キロ。登山慣れした方なら４時間もあれば有馬が見えます」と歩みを始めた森下さんのつま先は、なぜか浜手へ。大日霊女神社まで南下し、「魚屋道」と書かれた石碑の前で立ち止まった。「この神社には、かつて海の近くにあった深江浜えびす神社も祭られている」と森下さん。豊漁祈願と漁師の守護神として信仰が厚かった同神社近くでは、地引き網や手網漁が盛んで、イワシやスズキ、カレイなどが水揚げされていたという。「江戸の商人たちはこの辺りで魚を仕入れ、山越えを決意した」と森下さんの目線は山の方へ。一行の北上が始まった。

駅から約６００メートル歩くと、山を背に立つ赤く大きな鳥居が見えてきた。その５００メートル北にある「森稲荷神社」へと続く参道の始まり「赤鳥居」だ。７１５年（奈良時代）のある夜、深江の沖に現れた稲荷大明神の啓示で同神社は建立された。境内の手水鉢に目をやると、旧深江村時代にあった魚屋の名が刻まれていることが分かる。拝殿の鈴を鳴らして手を合わせ、峠越えの無事を祈った。

住宅街を抜け、甲南女子大を横目に歩くとコンクリート道が終わり、砂利道が始まる。「さぁ、本番です」と尾坂さんの声に力がこもった。

2019/3/12

神戸新聞NEXT

魚屋道に挑む（中）　登って登って、絶景で一息

大阪湾を一望できる「風吹岩」＝神戸市東灘区内　拡大

蛙岩。岩のくぼみを「カエルの首のよう」と話す森下孝一さん（左）と尾坂吉三郎さん＝神戸市東灘区内　拡大

大きな岩がごろごろし、間を縫うように芦屋ロックガーデンを進んでいく＝神戸市東灘区内　拡大

まだ中間地点を過ぎたところなのに雨ケ峠の標識に寄りかかる末吉佳希記者＝神戸市東灘区内　拡大

江戸時代、深江浜（神戸市東灘区）に水揚げされた鮮魚は六甲山越えの最短ルートで有馬温泉の湯治客のもとへ運ばれた。商人たちが利用したその道の名は「魚屋道」。現在も六甲山の登山ルートとして残る。道を守り、後世に伝える取り組みを続ける「魚屋道を歩こう会」のメンバーとともに、その道に挑んだ。（末吉佳希）

「ようやくスタートライン」

２月上旬。魚屋道（とやみち）を歩こう会メンバーの森下孝一さん（７０）と尾坂吉三郎さん（６６）と一緒に山道に足を踏み入れたのは午前１０時前。全１２キロの行程中、まだ約１キロ地点だが、気温が１４度と高めで、着込んだ服の中は早くも汗ばむ。

沢伝いに緩い上り坂を行く。空を隠すように茂った木々から漏れた日差しが、地面をまだら模様に照らす。足元に気を取られていると、不意に身長ほどの段差に突き当たる。膝を高く上げて乗り越えるごとに、息が上がっていくのが感じられた。

「頭が見えてきた」。４０分ほど歩くと、森下さんが前方を指さす。高さ約２メートルの巨大な岩「蛙（かえる）岩」だ。確かにカエルがちょこんと座っているように見える。やがて落ち葉ばかりの道は褐色で粒の粗い砂利道に変わり、辺りにはごろごろとした岩が転がり始めた。この付近は「芦屋ロックガーデン」など４本の登山道の集合地点。話し声が聞こえる先へ向かうと、絶景ポイント「風吹岩」に着いた。高さ３メートルの岩をよじ登ると、松林の奥に広がる大阪湾を一望できる。頬をなでる風が心地良い。靴ひもを強く結び直して、先を急ぐ。

今度は上り坂から一転、急な下り坂が延びる。次第に、東おたふく山の南麓に広がる「芦屋カンツリー倶楽部」のゴルフ場が見え出すと、そこは「畑の場」と呼ばれる中間地点だ。「深江の商人たちは積み荷の中継地点として、奉行所に届け出をした記録も残っている」と森下さん。自身もリュックサックを肩から下ろして見せた。

再び上り坂が始まったところで「この先の雨ケ峠でお昼休憩ですね」と尾坂さん。その言葉を励みに、歩く速度をグッと上げる。雨ケ峠に到着すると、数日前に降った雪がまだ残っていた。

【蛙岩】魚屋道を深江からスタートして約２．５キロ地点にある巨大岩。大蛇が巻き付いていたという目撃談から「蛇巻岩」、狼に魚を狙われそうになった商人が岩陰に隠れて難を逃れたことから「狼岩」などとも呼ばれている。

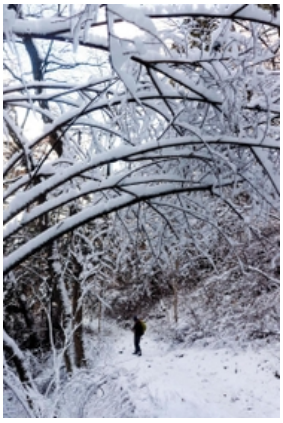
2019/3/13

神戸新聞NEXT

魚屋道に挑む（下）　雪道に商人の苦労痛感

六甲山頂付近でポーズを取る森下孝一さん（左）と末吉記者　拡大

樹氷のアーチをくぐって坂を下りた＝六甲山中　拡大



樹氷のアーチをくぐって坂を下りた＝六甲山中　拡大

出発から約７時間半をかけ有馬温泉に到着＝北区有馬町　拡大

江戸時代、深江浜（神戸市東灘区）に水揚げされた鮮魚は六甲山越えの最短ルートで有馬温泉の湯治客のもとへ運ばれた。商人たちが利用したその道の名は「魚屋道」。現在も六甲山の登山ルートとして残る。道を守り、後世に伝える取り組みを続ける「魚屋道を歩こう会」のメンバーとともに、その道に挑んだ。（末吉佳希）

中間地点過ぎの「雨ケ峠」。この辺りで景色は白み始めた。数日前に降った雪がまだ残っていた。

「ここで一服」と魚屋道を歩こう会の森下孝一さん（７０）と尾坂吉三郎さん（６６）とお昼休憩。３人あぐらをかいて円になり、弁当をほおばった。再びリュックサックを背負うと「山頂まであと少し」と森下さんがつぶやく。重たかったはずの足取りが少し軽くなった気がした。

ほどなくして、西から続いた「住吉道」に合流した。「ここから一気に登りますよ」。そこから先は「七曲り」という急峻な上り坂が続いていた。雪どけ水でぬかるむ足元を注意するのに必死で、メモを取る余裕は皆無。覚えていることといえば、かつて無いほどに息が上がったことだけ。「ヨイショ…。ヨイショ…」と口々にこぼしながら先を目指す。

そんな中、踏みしめていた土の地面が堅いコンクリートに一変した。同時に、「いったん、ゴールです」と２人の足が止まる。江戸時代から六甲山の山頂で営業を続ける「一軒茶屋」が眼前にあった。感動そこそこに、諸用のある尾坂さんはここで下山した。

「ここからは裏六甲。よりいっそう注意が要りますね」と森下さんは滑り止めのアイゼンを取り付ける。「江戸時代にアイゼンは無い。先人たちはいったいどうやって雪道を攻略したんだろうか」と思いを巡らし「ジャキ、ジャキ」と雪の坂道を一歩ずつ進んだ。「有馬まで１・５キロメートル」の標識を通過する。「湯屋は近い！」と江戸時代の商人になった気分で声を上げ、一気に下った。

「登山慣れしている方なら４時間もあれば有馬まで行きます」。出発地点の東灘区・阪神深江駅で森下さんが口にした一言。それから約７時間半後に北区・有馬温泉にたどり着いた。「さぁ、戻りますか」ときびすを返す…ことは無く、そそくさとバス停へ向かった。

座席にもたれると、ふくらはぎがこわばり、足裏がじんじんと痛んでいることに気が付いた。隣に座った森下さんの「７時間もかかれば、魚の鮮度はがた落ちでしょうね」との言葉にうなずくしかなかった。

2019/3/14